

令和7年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (11月11日実施)	総合評価 (3月24日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	<p>①共生社会の実現に貢献できる人材の育成に向けて、インクルーシブな学習環境を構築し、協働的な学びを通じた相互理解の深化につながる教育課程の編成や学校行事の精選・充実に取り組む。</p> <p>②1人1台端末を効果的に活用した個別最適な学びの充実により、総合的な探究の時間の充実を図るとともに、主体的に学ぶ意欲を高め、学ぶ喜びのある授業を実践する。</p>	<p>①インクルーシブな環境における協働的な学びを通じて、生徒一人ひとりの適性や関心を伸ばし、幅広い進路選択から進路実現を目指す。</p> <p>②1人1台端末を効果的に活用した個別最適な学びの充実のために、教員や生徒が実践しやすい環境をつくる。</p>	<p>①基礎的な学習の徹底と発展的な学習の展開ができるような教育課程を編成する。</p> <p>②ICT機器を活用しやすい環境整備や取扱い方法のマニュアル化を昨年度行ったのでその状態を持続させるよう維持管理する。</p>	<p>①3年間を通じ、生徒が主体的に学ぶことができる教育課程を編成できたか。</p> <p>②支障なく生徒・職員がICT機器を使用できるか。</p>	<p>①教科代表者会議を開催し、教育課程編成案について協議を行った。</p> <p>②クロームブック本体の更新があったが印刷用紙が使用できている。2学期になりIntraGuardianが更新されるまで接続も問題なく使用できていた。</p>	<p>①生徒の進路実現の観点を踏まえ、各教科より寄せられた意見を元に、年内の決定を目指して編成案を完成させる。</p> <p>②1月に予定されている大型電子黒板の導入に際しては、安全な機器管理に努めるとともに、授業における効果的な活用方法を開発することが課題である。</p>	<p>②生徒が授業に集中して取り組む様子が見られた。クロームブックについては、様々な場面でさらなる活用を進めてほしい。</p> <p>②従来のプロジェクトに加え、大型電子黒板も導入されるので、教員が資料を提示するだけでなく、生徒が意見交換したり発表したりする機会を設けられるとよい。</p>	<p>①類型による同一科目の単位数の差異を無くし、2年次の英語を標準単位数に戻した。また、1年次のキャリアAの配置を変更して特別募集生徒の大学進学に向けた道筋を確保した編成を行った。</p> <p>②授業だけでなく、Ashi活や総合的な探究の時間においても端末を利用して効果的な学習が行われた。</p> <p>②電子黒板の設定を早く行い、3学期当初より使用可能となった。ケーブルや付属品を管理する箱等の消耗品を今後揃え、より使用しやすい環境を整えたい。</p>	<p>①進学率・進学先を学校目標と照らし合わせ、次の教育課程編成に反映させていく。</p> <p>②端末については、充電切れや接続できないなどのトラブルが若干ではあるが、まだに見られるものの、より多くの授業で日常的に使用することで生徒の意識の向上につなげていく。</p> <p>②電子黒板については、校内研修を実施し多様な活用法を知ること、さらなる授業改善に役立てたい。</p>
2	生徒指導・ 支援	<p>①生徒一人ひとりの状況に応じた組織的な指導・支援体制の充実を図るとともに、安心・安全でインクルーシブな学校づくりを推進する。</p> <p>②学校行事や部活動等の活性化を通して、インクルーシブな人間関係の構築に向けた生徒の主体的な取組みを促す。</p>	<p>①生徒一人ひとりの状況に応じたきめ細やかな指導・支援体制の充実と、すべての生徒が安心して学べる環境の整備を更に推進する。</p> <p>②学校行事の運営や委員会、部活動等において生徒が主体性・自主性を発揮し、その達成感や充実感を自ら得ていく力を養い、心身ともに成長できるよう、生徒活動の活性化や部活動加入生徒の満足度の向上を図る。</p>	<p>①「かながわ子どもサポートドック」の取組を推進し、生徒の状況や課題を適切に情報共有し、ニーズに応じた支援を行う。</p> <p>①講話等を通して、人権や生命尊重の意識を醸成する。特に交通安全教育において、生徒向けの講座を効果的に計画するとともに、自転車ヘルメットの着用率向上に努める。</p> <p>②生徒会や委員会、部活動等の安心安全な活動を確保し、学習との両立が図れるよう支援していく。</p> <p>②生徒の意見や発想を尊重し、持続可能な学校行事となるよう、文化祭では会場設営、体育祭ではプログラムの検討、改善を進める。</p>	<p>①学年会議やケース会議、SC・SSWとの情報共有や学習環境の整備を通じて、生徒一人ひとりの状況に応じた支援を実施できたか。</p> <p>①各種講座のアンケート結果等で、生徒の意識の向上が見られたか。ヘルメットの着用率向上が見られるか。</p> <p>②学校行事や部活動等を通して生徒の主体性、自主性を引き出すことができたか。また、生徒は充実感や達成感を得られたか。</p> <p>②部活動の活性化は図れたか。また生徒会活動、部活動等が安心安全に行えたか。</p>	<p>①「かながわ子どもサポートドック」では、SC・SSWと協力しながら個々の生徒の実態に合わせた支援を実施することができている。</p> <p>①適切な時期に各種講座を実施し、事後アンケートでは生徒の意識の向上を確認できている。ヘルメットの着用率向上のため、交通安全委員会の3年生を中心に啓発活動を行った。</p> <p>②生徒会本部や各種委員会、部活動等の活動は、年度初めに立てた計画に基づいて円滑に進行されている。部活動の加入率は66.0%で昨年の53.5%を上回った。また、陸上競技部・弓道部の関東大会・全国大会進出などが特筆される。</p> <p>②6月に体育祭、9月に文化祭を開催した。体育祭は雨天順延、文化祭は厳しい残暑の中の実施となったが、いずれも日程や準備に大きな混乱なく実施でき、行事の満足度も全校的に得られた。その背景には、例年以上に生徒会本部の主体的な活動が大きかったといえる。</p>	<p>①教育相談体制の見直しを図るとともに、SC・SSWとの連携についても、教育相談COを中心に、学年の教育相談担当者とともに適切に実施していく。</p> <p>①各種講座のアンケート結果について、学校全体で情報を共有する必要がある。自転車ヘルメット着用率向上につながる啓発活動の内容の工夫が必要である。</p> <p>②部活加入率向上の明確な原因はつかめていないが、来年度に向けてさらなる啓発に努め、良い成果につながるよう、安全面にも配慮した支援を続けていきたい。</p> <p>②今後も生徒会本部生徒と担当教諭の綿密な意思疎通・連携を継続する。各委員会活動の幅も広がりつつあることから、生徒の負担の増加を考慮しながら、生徒の主体性、自主性を活かせる活動の機会や情報の提供に努めたい。</p>	<p>①自転車通学の生徒のヘルメット着用率を上げることは喫緊の課題である。警察や地域と連携して、講演や動画を見せたりして啓発を進めてほしい。</p> <p>②歴史研究部の活動がTVKなどで取り上げられていることは、部員以外の生徒にとっても足柄高校生としての誇りにつながる。</p> <p>②部活動加入率の向上や文化祭などの行事の盛り上がりや今後を継続して、生徒が通いたくなる学校づくりに取り組んでほしい。</p>	<p>①「かながわ子どもサポートドック」では、ニーズのある生徒をSC・SSWに繋げることができた。プッシュ面談対象は前年度より減少傾向にある。</p> <p>①通学時地域住民からマナーに関してご意見をいただく機会が大幅に減少したが、自転車ヘルメットの着用率は微増となった。</p> <p>②生徒会活動全般にわたって計画的かつ円滑に進めることができた。特に体育祭は2年目の開催となり、昨年度以上に盛り込めることができ、生徒の高い満足度を得ることができた。全国大会や関東大会に進出する部もあり、また加入率が前年度を大きく上回ったことも含めて部活動の活性化に向けた良い傾向にある。</p>	<p>①教育相談については、担任へ業務が集中することのないよう、教育相談COや教育相談担当を中心とした相談体制づくりを努め、ニーズのある生徒に支援が行き届くようにしていく。</p> <p>①シルバー人材活用費用の効果は非常に大きいことから、PTAにもご理解をいただき、次年度は日数を増やして取り組んでいきたい。交通安全に関する啓発活動は、警察や地域と連携して、今後も粘り強く継続的に指導を続けていく。</p> <p>②今後も生徒会や委員会の生徒との連携を深め、生徒の主体性、自主性を引き出すことができるように指導・支援していく。また、継続して部活動の活性化を進めていくように、生徒や中学生に向けた啓発を行ってほしい。</p>

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (11月11日実施)	総合評価(3月24日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	①生徒自身が考え、進路希望の実現に向けた行動をするなど、生徒の主体性を育むキャリア教育を組織的・計画的に実践する。 ②インクルーシブ教育実践推進校として、生徒一人ひとりの社会接続を実現するために、ていねいな進路支援を行う。	①総合的な探究の時間を軸とした体系的かつ組織的なキャリア教育を実践し、希望する進路の実現を支援する。 ②特別募集生徒だけでなくすべての生徒に対して多様な進路希望に対応した進路支援が行えるよう、校内体制の見直しを行う。	①総合的な探究の時間を通して興味関心の幅を広げ、進路意識を高め、生徒自身が進路について深く考えられるようにする。そしてその実現に向けて、希望に応じた進路ガイダンス等の拡充を図る。 ②「進路実践」の授業で蓄積してきた生徒一人ひとりの社会接続を実現させる支援方法について校内で共有し、組織的な進路支援を実践する。	①総合的な探究の時間の発表において、主体性、探究心、課題解決能力の高まりが見られたか。 ①生徒の進路実現に向け、実態に即した適切な支援が行えたか。 ②多様な進路希望に対応した校内体制が構築できたか。 ②上級学校卒業後の社会接続まで見据える、長期的な視点を持った進路支援が行えたか。	①2学年でゼミ形式の探究活動を開始し、幅広い探究が行えるようにしたことで以前よりも活発な意見交換が見られた。 ①Ashi活の時間に最新ニュースを読む時間を設けたことで自己の興味関心を客観的に判断できるようになり、進路探究につながる事ができた。 ②インターンシップ実施者数が延べ人数で100名を超え、適切な進路選択の一助となった。 ②進路支援について、グループ員だけでなく学年全体でサポートすることができた。	①少数ではあるが、探究活動に消極的な生徒も見られたため、主体的な取り組みを促すための方策について検討を続けていく。 ②総合型選抜や学校推薦型選抜など多様化してきている大学等の入試方式に対応できるような進路研究を重ね、学校全体で進路指導方針を共有し、教員によって指導にばらつきが出ないようにする。	①総合的な探究の時間における探究テーマについては、できるだけ生徒の身近なものを選ばせるようにすることで、地域の課題や、その解決策を考える機会となるとよい。	①総合的な探究の時間の深化を図った結果、実際に企業へ取材に赴くなど発展的な探究活動が見られるようになった。より良い探究活動に向けて、仮説の立て方について改善が必要である。 ②総合型・公募制選抜や就職での進路実現が前年度の1.5倍に増加し、生徒の希望に沿った進路支援を行うことができた。社会人講話等、社会接続を見据えた新企画も実践することができた。	①各学年の探究活動が単年度で終わらぬよう引継ぎ体制を構築し、進路グループを中心とした学校全体の取り組みへと発展させる活動を継続する。 ②公募制基礎学力型選抜など、多様化する選抜に対応できるよう、適切な支援の在り方について更なる研究を進める。
4	地域等との協働	①インクルーシブ教育実践推進校としての本校の取組を地域に情報発信するとともに、生徒の地域理解・研究と地域貢献を通じ、連携と協働を推進する。 ②地域防災の推進や情報交換等を通じて、近隣地域との連携を推進する。	①WebページやSNSによる本校の教育活動や地域貢献の取組の発信を強化するとともに、学校説明会等の充実により参加者を増加させ、入学志願者の増加につなげる。 ②紙上防災訓練(緊急時避難、DIG)、火災・地震想定避難訓練、帰宅困難生徒対応訓練(避難所開設訓練)を実施する際、近隣地域との関りを深められる内容のものにする。	①アンケート等で足柄高校を志望校とした理由を把握し、生徒や保護者の期待に応えた広報活動を実施する。志願者増のためのナーチャリングの有効性を検討する。 ①教職員と生徒が協力して学校説明会を実施する。 ②校内の防災関係のマニュアルを整備し、在校生対応のみならず、近隣地域と連携できるようなメニューを考えていく。	①WebページやSNSの更新頻度が上がったか。 ①入学者選抜で志願者が増加したか。学校説明会等に参加した生徒が入学したか。 ①学校説明会の運営に参加した生徒が充実感を得られたか。 ②近隣地域との情報交換および連携を十分に取ることができたか。防災避難体制の整備を進められたか。	①公式で発信する職員や投稿数が増え、情報をいち早く発信することができた。 ①学校説明会では、これまで以上に生徒が話す場面を増やしたことで、運営に参加した本校生徒も充実感が得られ、来場者にも好評だった。オープンスクールの参加者に説明会の案内を送信した。 ②PTA広報紙を近隣自治会にも回覧してもらうことで、本校並びに本校生徒の取組等を知ってもらえたと考えている。 ②10月に予定していた帰宅困難生徒対応訓練は天候不良で中止となったが、近隣自治会と南足柄市防災安全課との情報交換は実施できたので一定の機会は果たせた。	①広報活動の努力が志願者増につなげられるかが課題であり、説明会等の行事の適切な時期を検討する必要がある。 ②近隣地域に見てもらおうという点からは、PTA広報紙の内容についても工夫の余地があるかもしれない。 ②帰宅困難生徒対応訓練については、地域を巻き込んだ避難所開設訓練的な要素を含んだ形を残すなど、地域への協力や地域防災の一助となるよう、内容を工夫して実施していきたい。	①地域の行事や軽音楽部が参加してくれたり、美化活動と一緒に行ったりすることで、学校・地域双方がお互いをより身近に感じられるようになる。 ②自治会役員が帰宅困難生徒対応訓練に参加し、訓練の様子や、南足柄市の防災物品の状況などを確認できたことは良かった。	①Webページでは常に新しい情報を発信し、内容が新聞記事に取り上げられたこともあった。 ①オープンスクール参加者に案内メールを送付し、説明会への参加につなげた。また、部活動の体験見学会を復活させ、第3回学校説明会を新規に実施し、いずれも参加者が多く好評であった。入学者選抜でも、志願者が前年度より増加した。広報活動の工夫の他、50周年に伴う制服の刷新を説明会や文化祭でPRしたことも奏功した。 ②今年度もPTA広報紙を自治会で回覧してもらい、本校の取り組みについて知ってもらう機会をつくった。 ②地域美化清掃では生徒通学路まで範囲を広げて行い、学校の取組みや対応を住民の方にアピールできた。また、帰宅困難生徒対応訓練では、近隣自治会の方と南足柄市防災安全課との情報交換の場となり、避難所開設となった場合の課題の発見や疑問点の解消の場となった。	①更新頻度が上がったが、更新内容が特定の部活動に偏りがちなので、大きな大会の成果でなくとも日常の活動を広く報告することを目指したい。説明会もHPをみて参加する方が多いので、内容の一層の充実をはかりたい。また、可能な範囲で、参加者への次のイベントの案内をする。 ①中学生の志望校決定時期が遅くなっているため、2学期に力をいれて広報活動を実施する。イベントが増えたことによる負担増を緩和するため、他の業務を精選していく必要がある。 ②PTA広報紙の配付範囲拡大により、どの程度本校の取組みを知ってもらえたか検証する方法を考える。 ②通学路の問題への対応や地域防災等に関する役割をどう果たしていくか、今後も検討していく。
5	学校管理 学校運営	①学校全体で教育環境に対する課題を共有し、校内施設と教育活動のバリエーションを進めるとともに、安心・安全な学校づくりを組織的・計画的に推進する。 ②不祥事防止に努め、実効性の高い組織的な取り組みを行う。	①生徒の生活環境を整え、安全でストレスの少ない学校生活を送れるよう、物品、施設面で配慮する。 ①校務のDX化による職場環境の整備を通じて教職員の働き方改革を行い、ゆとりをもって生徒に対応できる時間を確保する。 ②不祥事防止研修を継続的に実施し、全校体制での防止策策定に取り組む。	①生徒からの要望を聞く体制を整え、学校生活を物品・施設面の管理・補修により支える体制を整える。 ①新たな学校・家庭間の連絡システムや採点システムの導入、業務アシスタントの1層の活用により、教職員が行う業務の整理と精進を促す。 ②毎月定期的な不祥事防止研修を開き、職員全員が注意喚起するとともに、個々に自己点検を行い、不祥事防止を自分事としてとらえる機会とする。	①事務室と連携を取り、生活用品の補充や補修を適切に行なったか。 ①企画会議、グループ・学年の会議等を通じて業務内容や業務遂行手順の見直しを行ったか。 ②場面に応じた注意点や改善点の共有など、組織的な不祥事防止を実践できたか。	①動きが悪いH.R教室のドア交換や3年各教室の照明のLED化など、安全でストレスの少ない教育環境づくりを進めた。 ①会議のペーパーレス化や業務アシスタントの活用により、教員が時間ゆとりをもてるよう努めた。 ②毎月のテーマに沿った内容で実施する不祥事防止研修に加え、映像資料の視聴による研修も実施し、不祥事防止を自分事としてとらえる機会とした。	①テニスコート改修など、予算の範囲内で必要な事業を実施する。 ①資料のオンライン上の共有を進め、各種会議の時間や回数削減を努める。 ②気になることはすぐに管理職に相談しやすい雰囲気づくりや、職員同士が互いに指摘したり話題にしたりできる風通しの良い職場づくりを進め、事故・不祥事の根絶を図る。	①教員が多忙であるという状況はなかなか改善が難しいところであるが、それぞれの業務が属人的にならず、組織的な取組みとなるよう進めていってほしい。	①必要箇所のドア交換や照明のLED化を行い、学習環境の向上を図った。 ①業務アシスタントや業務サポーターの活用を進め、教員が受皿となるように進めていっている。 ②時宜に合った定期的な不祥事防止研修により、職員の意識を高め、問題行動の未然防止に努めることができた。	①設備や備品の老朽化に備え、計画的な改修や更新を進めていく。 ①私費会計におけるインターネットバンキングの導入により、担当者の負担軽減や経理上の事故防止につなげていく。 ②定期的な研修については、毎月の担当をグループで持ち回るような形式として、職員が不祥事防止を自分事としてとらえることができるようにしていきたい。